

2010.10.22
週刊ポスト

食う・見る・浸る — いのちの洗濯

ジタバタ

鎌田 實

しない

イラスト／江口修平



8 月末から9月の半ばまでピースボートに

乗って、アテネ、ナポリ、マルセイユ、バルセロナ、カサブランカを回った。3か月間で世界一周。一番安い部屋は3食付きで99万円。今回は約10000人が乗船。そのうち4割が60歳以上、3割が壮年層、3割が若者

だった。

船の中ではグローバルスクールが開催された。そこに引きこもりの若者約30人が参加していた。内閣府の調査によれば、引きこもりは全国で70万人いて、その予備軍は155万人にも及ぶという。かなり深刻な事態である。

出会った引きこもりの子の中には発達障害を抱えている子もいたが、心理療法士が良い聞き役になってうまく溶け込んでいた。多くの若者が船に乗っていると「船マジック」とでもいおうか、なぜかイキイキしてくるようだ。僕は、引きこもりの若者とスクールだけではなく、同じテーブルで食事をし、お菓子パーティにも招待された。気に入られたようだ。

22歳の女性は中学1年生の時に不登校が始まった。うつ病と診断された。結果として引きこもりになった。数年後、少しずつ学校に行ける日が増え、通信制の高

第37回「ピースボート」で「引きこもりの若者と語り合う」の巻



船中での引きこもりの若者との語りには有意義なものがあった。

校を卒業した。うつ病の薬もいらなくなった。

彼女は、「引きこもりや病気などを乗り越えた人、あるいはぎりぎり踏ん張っている人、そういうこととにまったく関係なく生きてきた人。いろいろな人と出会ってみたいと思って船に乗りました」と話し、仲間の世話を焼いてくれた。

また21歳の男性は、独りで考え込む少年だったという。高校も中退、専門学校も卒業できなかった。何もかも嫌になって死のうとしたが、たまたま生き残った。ピースボートセンターに行くようになって、そこでいろいろな人と出会い、船に乗ることを決意した。

20代の女性がナポリで一時的に船を降りた。仲間3人と電車でバルセロナに向かうという。サポーターたちは、内心ハラハラしながらも、自分で考え、判断することを認めている。だからこそ、自分たちの力で歩もうと彼女たちも思う。

彼女たちの小さな冒険は大成功。船がバルセロナから出航する前に無事に戻ってきた。その顔は、誇らしげにイキイキしていた。「集団行動ができない」という15歳の少年もフランスのモンサンミッシェルが見たくなった、フランスで船を降りてモロッコで合流する、と離脱していった。

それぞれが自立を始めた。僕は世界的な建築家、ガウディを研究する、大学の先生の研究室を訪ねるオプショナルツアーに参加した。37歳の引きこもりの男性と一緒に回った。僕は彼を観察していたが、実に積極的に行動していた。スペイン人の美人ガイドに質問した

り、僕と一緒に写真も撮った。したいこと、やってほしいことがどんどん言えるようになっていった。多くの若者たちが中学校で挫折していた。思春期と関係している。視野の狭さ、思いこみ、頑なさ……すべて思春期の特徴である。それが世界を見ることで視野が広がり、船の中にはいろいろな人がいることに気づく。いろんな人がいていいことに気づく。自分の存在も少し認められてくる。共同生活をしていければ頑なな過ごし方はできないため、少しづつ柔らかくなり、思春期の特徴が改善していく。

引きこもりは病態ではないと思つた。ある状態を示しているだけ。状態なら変わる可能性はある。引きこもりというのは、正常な能力の一つで、彼らはその能力を使って引きこもっていたのだ。大事なことは長期化させないことだ。

世界を見る、ということ

は引きこもりの治療法の一つになるかもしれない、彼らを見ていて僕は思つた。